Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

地域史を通じた「専門知の民主化」の結晶 : 『たどる調べる 尼崎の歴史』を読んで(時評・書評・展示評)

佐藤, 大介

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,9:119-122

(Issue Date)
2017-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010064

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010064

KOBE UNIVERSITY

地域史を通じた「専門知の民主化」の結晶
――『たどる調べる 尼崎の歴史』を読んで――

佐藤大介

兵庫県尼崎市の市制一〇〇周年を記念して刊行された『たどる　調べる　尼崎の歴史』。本書第三部「総論」で指摘されているとおり、尼崎市では、戦後一九六二年から一九八八年までの事業で刊行された『尼崎市史』全一三巻（別巻一冊）や、市政九〇周年を期に刊行された『図説尼崎の歴史』がある。「一〇〇周年記念」の本書は、しかし『図説』刊行後の十年間の出来事をまとめた概説書ではない。戦後の尼崎市、さらに尼崎市地域歴史資料館を拠点に継続されている、多様な主体による歴史叙述の歩みをまとめた成果であり、またそこで明らかになった課題を共有する書である。

このような書物となった理由については、第三部「総論」、さらには尼崎市立地域研究史料館の辻川敦館長を司会に、執筆者の岩城卓二、市沢哲両氏と稲村和美尼崎市長の対談（『地域史研究』一一六　二〇一七年）の中で明らかにされている。市民との双方向性を重視しながら、自らの手で地域の歴史を調べるための方法について共有する、ということが目的である。鼎談では関係者自らによる検証も十分なされており、評者としてどこまで実のある評を提示できるのか心許ないが、以下印象を述べていきたい。

◇

第一に、地域の歴史を調べるためには多種多様な史料がある、ということを、専門家ながら改めて確認させられた。各時代の「史料編」で示される文書、絵画、図面、考古遺物、建造物、写真、さらには記憶・思い出に至るまでの多様な対象が「史料」である。このことを市民と共有しておくことが、それらを消滅の危機から救う上で必須、ということは、阪神・淡路大震災を経験した尼崎市などの関係者から発信された重要な問題提起である。それでは、社会的合意を形成するにはどうすればよいのか。本書に結実した尼崎市での長年の取組が、そのひとつの方法を示している。恥を承知で記せば、文献以外の史料の取り扱いに無知な評者にとっては、航空写真を用いた微地形図の作成など、他分野の調査方法を興味深く学ぶ機会になったのである。

多様な史料の存在は、実際に尼崎の歴史を調べようとする市民にとっては、それぞれの地元の歴史に対する興味関心の以前に、身近に残されたモノそれ自体とのふれあいから歴史に近づく環境が準備されている、ということでもある。それに加え、「尼崎の現代」（第三部第六章）では、行政や私的団体に加え、今を生きる人々の個人的な記録や記憶もまた「（未来の）歴史資料」であることが示される。歴史を調べる主体であるとともに、市民一人一人もまた歴史的存在である、ということへの気づきを促すものであろう。そのことは、本書が目指す「従来以上に多様な主体による、多様な視点に立った現代史研究」（二二六頁）に取り組むための基礎的な環境を調えることにもつながっていくだろう。

ところで、本書「入門編」では、分析対象となる史料・史実に即して、これまで取り組まれてきた研究史が網羅的に整理されている。実は「わかっていないこと」が多い。自治体史として、これほど多数の問題提起を示している例はないだろう。そのことは、歴史に興味関心のある市民の参加を促す動機となると考えられる。一方、史実にたどり着くまでの手法は、まさしく専門研究のそれが示されている。前述の対談において、稲村市長は「専門家ではない市民にとって、史料をひもとき、主体的に調査研究を行なうというのは、難しく感じる面があるのも事実です」と率直に述べている。実は、私自身もこの重厚な内容を、はたして一般市民が消化できるのだろうか、という懸念を最初に感じた。しかし、「市民の調査・研究を支援する際の対話に必要な道具」であるからこそ、専門的な調査方法こそが共有されなければならない、というのが本書の立場であろう。インターネット検索によるコピー・アンド・ペーストで、自分の思い込みで集めた断片を寄せ集めて仕上がる程、地域の歴史叙述は安易なものではない。また、必要な手順を専門家だけが独占し、成果を「薄めて伝える」ことが「普及」ではない。科学的手順を知る側、史料情報を持つ側が、その方法を積極的に開示し、共有していこうという手法は、四〇年以上の史料館を拠点とする活動を通じた歴史研究の主体としての市民に対する強い信頼に裏付けられたものだと読んだ。

「実践編」では、多様な主体によって明らかにした史実が、その調査過程と共に記されてゆく。尼崎市の歴史資料が、それを通じた地域内外との交流へと広がっていることがわかる。卒業論文や研究者の分析、行政の方針に対応したまちづくり活動に加え、家族の縁、五〇年前に触れた手話と、きっ

かけも様々である。契機の多様性の提示は、前述した歴史研究としての専門的手法とともに、事例は尼崎市域であっても、地域の歴史文化研究の教本としての普遍性を確保するものだと考える。

市民、多様な主体の参加を前提にした歴史叙述において、必ず突き当たるのが、専門研究と、市民の問題関心の関係である。本書の内容を構想するきっかけのひとつとして、総論では『図説尼崎の歴史』が、「身近な事象についての研究は蓄積」される一方、「市域の事例を日本史の大きな流れに位置づける、あるいは市域の事例から歴史学研究の成果を問い直すという深みに欠け」たとして、「大きな視点からの研究を促し、組織することも必要」とする。一方、戦国期城郭を扱った第三部第三章第三節では、「専門家としての文脈」の一方、地域に暮らす住民はそれとは異なる「単一ではなく多様な関心」をもっており、「多様な文脈をどれかひとつに統一したり、他を排除したりしてしまうのではなく、それぞれの文脈を照らし合わせて学び合うことが重要」だとする。多様な主体により掘り起こされる多様な史実を、いかにとりまとめていくのか。確かな方法論に基づき、専門研究の枠組みに引きつけていくことはひとつの方法である。その一方、「住民自身の文脈」が、時に意外な史実を掘り起こし、新たな論点を示すということも、地域に暮らす人々と協働で歴史文化の研究にかかわったことがあれば一度ならず経験することでもある。主体の多様性、双方向性を前提とした地域の歴史研究や叙述のあり方については、現場での模索がなお続いているということであろう。その成果が、「次」の叙述に生かされることを期待したい。

◇

「三・一一」は、科学に対する市民の信頼を揺るがす出来事でもあった。原子力災害がその代表であるが、そこでの科学の批判的検討の中で、「専門知の民主化／民主政の専門化」という理念が示されている（平川秀幸「信頼に値する専門知システムはいかにして可能か―「専門知の民主化／民主政の専門化」という回路」尾内隆之・調麻佐志編『科学者に委ねてはいけないこと　科学から「生」をとりもどす』岩波書店　二〇一三年、初出二〇一一年）。政策過程における必要な専門知を社会に開くことで、専門化に限定されない様々なインプットや多角的な批判的検討が可能となる。その結果、専門知の質、「民主政の専門化」の度合いが高まり、社会から

の要望に応じることで信頼が確保される。市民にとっては活用出来る知的資源の幅が広がることで専門的能力が構築され、結果に反映されることで自信の構築にもつながる、という。本書に結実した尼崎市の歴史における取り組みは、差し詰め「地域史における専門知の民主化」であろうか。また、史蹟や建造物のまちづくりへの活用、それ以前に、本書第三部特論3で述べられる、すべての人に開かれ、情報や史料に触れ、人やボランティア活動との出会い、新たな発見（「！」）と問題（「新たな「？」」）を見つける場所としての史料館の運営のあり方は、地域史の解明を越えた、住民による自治の「専門化」だと見なせよう。本書に結実している取り組みが、歴史文化の分野を超え、科学・専門知と市民との信頼関係構築における最良の成果のひとつとして、広く知られてほしいと願う。

それにしても、本書からは、地域の歴史文化において史料館という「場」を設け、史料を生かす「人」を育み、持続的に継続していくことの意味の大きさを改めて痛感させられる。私が活動に取り組んでいる地域では、史料保存施設以前に、行政に文化財保護の専門組織が存在しない自治体もある。とはいえ、それらの地域の中には、自治体史編さん事業において、長年にわたって史料の保全や情報化に取り組んでいた例も見られた。しかし事業の終了、さらに「平成の大合併」によって、編さん組織のあった部屋が、蓄積された膨大な地域の歴史資料情報はそのままに、体育用具や不要物が積み重ねられた物置と化している悲しい状況を何度か目にした。三・一一を経験した地域では、デジタルアーカイブの構築に資源が投じられる一方、形ある歴史資料の保存、それを活用する人づくりへの支援は乏しい。尼崎市が現在地までたどり着くのに四〇年以上かかっているということの重みと、基盤作りが果たせないまま、大災害とその後の「復興」で、今まさに歴史自体を失おうとしている地域の現実に向き合い、少々悲観的にもなっている。

しかし、尼崎市においても、「一歩目」があった。試行錯誤を経て示された歴史文化の可能性に勇気づけられながら、引き続き学んでいきたい。